

ハンセン病知る入り口に

青森の松丘保養園企画展

入所者の絵や陶芸 歴史、生活伝わる作品

弘大資料館

全国に13カ所ある国立ハンセン病療養所の一つで、日本最北端に位置する青森市の国立療養所松丘保養園。入所者が手掛けた療養所の風景画、陶芸や、同園と関わりを持つアーティストの作品を集めた企画展「ダイアローグー松丘保養園と出会う」が、弘前大学資料館で開かれている。同園の入所者は現在44人で平均年齢は88歳を超え、園の存在はほろかハンセン病自体を知らない世代も増えているといい、企画展関係者は松丘保養園やハンセン病の歴史を知るための入り口になればと願っている。

(西尾 英)



会場には、後遺症が残る入所者のために作った陶芸などが並ぶ

交流会館が開館。園の歴史や生活の紹介、入所者の文学作品の展示などを行っているが、今回の企画展は園を離れた所に園と出会う場所をつくることを目指した。展示は園の入所者の伯龍さん、成瀬豊さん(故人)の2人と、東京芸術大学修士課程在籍で園に携わる有志でつくるふきのとうの会発行「ばっけ通信」編集長の木村直さん、環境デザイナーの廣瀬俊介さんの作品に加え、研究者らによるテキストで構成している。

伯龍さんと成瀬さんの作品は、着想を含め松丘での暮らしと密接に関わるという、絵画やドローイングを手掛けた成瀬さんの絵は園の機関紙「甲田の裾」(休刊中)の表紙画などにも使われた。本会場では、点字用紙に描かれた園内のスケッチなどを見ることが出来る。また、陶芸家の伯龍さんはハンセン病の後遺症で動きにくい手でも使える生活のための陶芸作りを行っており、熱を感じにくい人が低温やけどをしないよう2重構造にしたり、すべり止めを付けたりした湯飲み茶わんなどを出品。会場では実際に手に取って鑑賞することができる。

このほか、廣瀬さんの三内地域の環境調査・フィールドノートからは長い歴史の中で地域社会における松丘保養園の疎外がうかがえる。木村さんは、脱走防止のために作られた土塁の痕跡や外界との物理的境界を形成した松林などが、隔離政策が違憲とされてから20年以上たった今になって、コロナ禍での交流の断絶で再び「境界線」として浮き彫りになった様子を写真で表現した。

企画を担当した弘前大学社会科学部部の白石壮一郎准教授は「何よりも知ってほしいのは、保養園は特別な場所と思われがちだが、社会交流会館もあり行ける場所であるということ。企画展をファーストステップに、松丘やハンセン病の歴史を知る次のステップにつなげてほしい」とする。企画展は1月29日まで。入場無料。日曜、祝日、年末年始(12月28日～1月4日)は休館。

ハンセン病は、らい菌に感染し手足などの末端神経がまひしていく病気。現在では特效薬があり治療するが、かつては恐れられ、日本では1900年代に入って各地に療養所を作り「らい予防法」で患者を収容する隔離政策を始めた。隔離政策は特效薬が開発された後も見直されず、96年に同法が廃止されるまで約90年間続き、患者ばかりかその家族も差別や偏見に苦しんだ。

松丘保養園は1909年に北部保養院として設立され、その後国立療養所松丘保養園に改称。40年代には800人以上が入所し療養生活を送っていたという。

ハンセン病問題の歴史全般などについては、東京都の国立ハンセン病資料館に常設展示があるほか、松丘保養園でも2018年に社

※この記事は陸奥新報社の提供です。

この画像は、当該ページに限り陸奥新報の記事利用を許諾したものです。

転載ならびにこのページへのリンクは固くお断りします。

[問い合わせ先] 弘前大学資料館

jm3432@hirosaki-u.ac.jp